

自由闊達な 松本博先生を偲んで



松本 博氏略歴
一九一三年三月二十二日生まれ。三七年京都帝国大学医学部を卒業後、兵庫県立医科大学、神戸医科大学、神戸大学医学部教授などを経て、七六年同志社女子大学教授として入社。八三年に定年退職されるまで教育と研究に尽力された。
二〇〇二年五月四日永眠 八十九歳

総務課からの連絡で先生の訃報を知ったのは、青葉の緑が濃い季節でした。ご退職から二十年近く経っていて、その頃は年に一回の年賀状でご機嫌を伺うだけになっていましたので、最晩年に奥様のお導きで洗礼を受けられ、安らかに天国に召されたことも、全く存じあげませんでした。阪神大震災の直後お電話を差し上げたとき、「水は出なくても、酒があるから大丈夫」と、呵呵大笑されたのが、耳に残っている最後のお声で、震災、奥様のご逝去と相次ぐ、ご不幸に遭われて急に老け込んでおられたのかも知れません。

訃報を聞いてとくに、「しまった!」と感じました。もっとお話を伺っておきたかったという気持ちと、日常の多忙さにかまけてお励ましをして差し上げられなかったことを悔やむ感情が交差していたようです。そこで早速、ご在職当時の助手さんと院生に連絡をとって、阪急御

影から少し山手に入ったご自宅にお悼みに出かけました。ご子息ご夫妻に見送られてご自宅を辞しての帰路、私たちだけでささやかな偲ぶ会をもったのですが、そこの話は、先生のお人柄そのまゝの、ユーモアのセンスに溢れ、自由闊達、豪放磊落な先生の思い出ばかりでした。

先生は、神戸大学医学部長を務められ、ご退官の後、一九七六年から七年間、本学で教鞭を執られました。最初の院生が私でしたが、実は、先生には、指導教授の籍をお借りして実際は当時助教だった沖中先生の下で栄養化学を専攻したい旨をお願いをしたところ、無理をお聞き入れくださったばかりか、実験結果をご報告に上がるたびに、私が作った拙い代謝マップにマーカーを入れながら、「こうなんですか。こうなんです」と少しも偉ぶることなくご指導を下さったのです。

「そつそつ」誰かが口火を切った。「あのときの、コーヒーフレッシュ!」。そうなんです。先生はアイスコーヒーを日に何杯もお飲みになるので、助手さんが「先生、フレッシュは一回に半分にしてください」と申しあげたのです。先生はそれを守ってくださっていたのですが、あるときお客さまがいらして、フレッシュを一個ずつ付けてお出ししたところ、「ここではフレッシュは半分しか入れてはいけません」とおっしゃっているではありませんか。それがユーモアだったのかご不満の意思表示だったのか、もうお聞きすることは叶いませんが、そんなエピソードには事欠かない先生でした。結局笑いの絶えない偲ぶ会になってしまい、慰められていたのは私たちだったと気づいたのです。

心からご冥福をお祈り申し上げます。
仲佐輝子（女子大学生生活科学部教授）

武邦保先生の思い出

武邦保先生には恩師として、また同僚として本当に色々とお世話になったが、それに加えてご近所同志というよしみもあって、とても親しくお付き合ひしていただいた。身近な話題―例えば先生が町内会長をされた時の提案がきっかけで、遅ればせながらも京都市のゴミの分別収集が始まったこと等―に花が咲き、周りの人々から「ローカルな話題で盛り上がっている」とからかわれたこと、近所の商店街で、専門書のコピーをされるため本屋さんやコンビニに通っておられる先生によくお会いしたこと、電車やバスで一緒に楽しくお話をさせていただきながら帰宅したこと等、どれもが懐かしい思い出だ。それでいて自宅にお邪魔したのは葬儀の後、もう先生がおられなくなってしまうからだった。遊びに来るようになるといつも誘って下さったのに……。丸



武邦保氏略歴

一九三三年十二月五日生まれ。六〇年同志社大学大学院法学研究科修士課程修了後、商業高等学校嘱託講師などを経て、六九年同志社女子大学助教授として入社。七五年同教授。九四年には永年勤務者として表彰を受けられ、九九年退職後、特別任用教授を務められた。二〇〇二年七月二十三日永眠。六十八歳

テーブルの置かれた、いかにも温かい、家庭的な感じのするダイニング。先生はこの円卓で、お孫さんたちと、あるいは遠くから訪れたたくさんの学生や卒業生、お友達と楽しく語り合われたのであろう。壁一面に備えつけられた、天井まで届く高い本棚のある書斎で奥様からお話を伺った。先生は最後まで研究・教育への情熱を失われることがなく、体調のすぐれぬ中、春学期の授業も試験も全て終えられ、夏に東京で行われた学会にもぎりぎりまで出席を予定されていたとのことである。「関東の出ですから東に向う新幹線に乗るのが大好きでした」とおっしゃる奥様のお言葉に私は、本を読んだり車窓の風景を眺めたりして楽しそうに電車に乗って行かれる先生のお姿を想像し、ほのぼのとした気持ちになった。

七月二十三日の朝、ご家族に見守られ

て安らかにお亡くなりになった先生は、片道切符を手を弾ませながら「天国行き超高速列車」に乗られたのである。同行の旅人たちも、先生のお人柄のなせる業であつという間にリラックス。うちとけて自己紹介などしながら楽しい宇宙旅行となったに違いない。少し首を傾げニコニコしながら、窓の外に輝く銀河を眺めておられる先生のお姿が目につく。 「わあ、凄いなあ」 などとおっしゃる声も聞こえてくるようだ。天上世界に無事到着し神様にも大歓迎され、先生は今、最高に快適な時を過ごされていることであろう。先生のことを考えるといつもほのぼのとした気持ちにさせられるのである。たくさんの楽しい思い出を残して下さった武先生。先生に感謝し、そのご冥福を心よりお祈りしたい。

甲元洋子（女子大学芸学部教授）

簿記・会計教育に一身を捧げられた今井信二先生



今井信二氏略歴

一九一八年十一月二十八日生まれ。四六年五月同志社経済専門学校嘱託講師、四九年同志社大学商学部助教、授兼任同志社経済専門学校教授、五六年同商学部教授、六一年同大学院商学研究科教授に就任。八九年同名誉教授。

二〇〇二年八月九日永眠 八十三歳

二〇〇二年八月九日同志社大学名誉教授今井信二先生が永眠された。享年八十三歳であった。先生は商学部創設時代から今日まで大学の簿記・会計教育を支えられたある意味で商学部の看板教授であった。

同志社には一九四六年に経済専門学校嘱託講師として来られ、商学部創立とともに助教授に就任、大学院設置とともに大学院担当教授となられた。大学院設置にあたって当時の文部省が今井先生を指名したといわれており、いわば学部ないし研究科創立の礎であったということもできる。

著書は『簿記概論』、『簿記通論』、論文は「英国における分割払販売」ほか多数。研究の中心は分割払制度ないし割賦販売制度であり、一般商品や固定資産の分割払い、消費者信用を利用した分割払

いなど日英米の比較研究をすすめられ、晩年には「聖書における利子」なども研究対象とされていた。しかし今井先生について語る場合、簿記教育に全力を捧げられた点を抜きにはできない。

担当科目は簿記論、今日でこそ簿記会計は企業人にとって不可欠の知識・技法となっているけれども、初期は必ずしも重要性が認識されていたわけではない。第二次大戦後の企業経営再建の要として正確な記帳処理（簿記）の重要性を受講生に熱く講義されたという。

当時学部学生に対し学生団体として「会計学研究会」の創設を指示され、今日同志社が公認会計士や税理士など会計専門家を多数誕生させるきっかけともなった。

先生の講義は学生のあいだで親しみをこめて「今井の簿記」と呼ばれていた。

「今井の簿記」を懐かしく語る卒業生は多い。当時の受講生のあいだでは厳しい指導で有名であったという。

演習は先生のお人柄を慕って大勢の学生が詰めかけた。現在各界で活躍中の人の中には、職業会計人のみならず、上場企業の役員など多数おられる。

今井演習の卒業生の組織は「同信会」という。約九百人以上からなる。一九八八年には先生を慕って古稀記念祝賀会を開催し、北海道から沖縄まで約四百人の演習生が京都と名古屋の会場に参集し、先生の古稀をお祝いしたことが懐かしい。薫陶を受けた卒業生の今井先生に対する思いの大きさを推し量ることができる。

今井信二先生のご冥福を心からお祈り申しあげる。

川端保至（大学商学部教授）

幻の普茶料理



竹部琳昌氏略歴
一九三〇年二月十七日生まれ。京都工芸繊維大学非常勤講師、岐阜大学講師などを経て、六六年同志社大学工学部助教授（独語担当）として入社。七三年同教授。九五年同名誉教授。
二〇〇二年八月十七日永眠 七十二歳

おっと、——先生の左手がハンドルを放して助手席のぼくの体を押さえる。二十分ばかり走ってもう三度目である。この日ぼくらはアルバイトの女性二人を誘って先生運転の車で黄檗山は万福寺に出かけた。まだ上立売にバラックの研究室があつた頃である。玄関脇の小部屋でいつも先生が数人、よもやまのあつちの方の話、こつちの方の話で時間を潰していた。壁はボール紙のように薄く、ときに怪しげな話も隣の事務室に筒抜けで、苦しげに笑いをこらえる気配が手に取るように伝わってこようという、まず路地裏の安アパートみたようなところなのだ。しかしそこはぼくにとつて一切の気遣いも遠慮もいらぬと思えるほどに居心地のよいところでもあつた。

新人社員である。毎週のように歓迎会があつた。学部や研究室のものは一回ずつだが、このアパートのはのべつ幕なし

で、全員参加のときもあれば四、五人位のこともあり、しかし琳昌先生のみは皆勤でご自身がお誘いになることも二度や三度ではなかつた。黄檗山行きはその一応の打ち止めである。六月に入つたというのに少し膝の抜けかげんのズボンにツイードの所々糸のはつれの見えるジャケットは四月の頭から少しも変わっていない。煙草の焼け焦げをマジックインクで塗りつぶした上着を平気で着ている先輩を実際に同僚に持っていた時代のことだから先生のなりを格別奇妙とも思わなかつたが、それでもこれはこれでやつぱりちよつと変わった御仁だわいと、先生には失礼ながらぼくはひそかに面白がつていた。そうした磊落ぶりは車の運転にも表われた。運転はできなくとも上手下手くらいはすぐわかる。先生のおおよそ巧拙の埒外とも言うべく、とにかくどこがどうなっているのか知らないがたえず

がつくんがつくんつまずく。信号にさしかかると殆ど毎度ぼくは前につんのめる。すかさず先生の手が伸びてくる。こつちはつねに両手両足を突つ張つてそれに備えておかねばならない。いつだって疲れること甚だしいのだ。その日、万福寺の普茶料理に何がでたか——いつかまた確かめに行かねばならぬ。

ぼくはその後何回も何十回も先生の車の助手席に座つた。先生が一度も事故を起こさなかったという実績の故では、たぶんない。何ものにもとらわれずに自由奔放に生き散らすというおおよそぼくには金輪際できぬ生き方をついに貫きとおして逝かれた先生の、お若い頃からの人となりに妙に惹きつけられていたのであらう。人の世の出会いの有難さを教えてくれた人をぼくはまた一人失つた。

山本雅昭（大学言語文化教育研究センター教授）

在りし日の伊藤規矩治先生



伊藤規矩治氏略歴

一九一二年一月七日生まれ。日本放送協会嘱託ドイツ語放送担当などを経て、四六年同志社大学文学部助教授として入社。四八年二月同教授、五四同年大学院文学研究科教授に就任された。八二年同名誉教授。二〇〇二年九月十六日永眠 九十歳

それは思いもかけない突然の訃報でした。伊藤規矩治先生とのお別れは、ごく近い人ただけで、先生のお住まいのある「アクティバ琵琶」の小ホールで行われました。祈りと賛美歌と献花だけの質素で奥床しい葬儀式でした。

ご家族のお心遣いで、先生が望んでおられた、いかにも先生らしい儀式だったと思います。先生は、周りには、とても気を遣われる人です。最愛のご息女に先立たれたときも、われわれの前では、涙も悲しみも封印しておられました。その事情を知ったのは、ずっとあとのことです。この度も入院の情報は、ごく僅かな人たちしか知らなかったはずでした。

先生ご夫婦は、長年住み慣れた紫竹の邸宅を引き払い、有料老人ホーム「アクティバ琵琶」に移られました。ここは琵琶湖畔に建ち、設備も整い、何よりもケ

ア・センタ―が併設されているので、後の生活には安心です。部屋からの眺望は素晴しく、とくに対岸の山の端から昇る朝日は、毎朝表情が変わるので、とても楽しめたようです。ときどき私たちが夫婦が訪ねると、必ず食堂に案内されました。食堂は老人たちのサロンで、皆さんが先生をいかに慕っているかがよく分かりました。ご葬儀のとき、大勢の住人が、先生との別れを惜しんでいる姿が、とても印象的でした。

同志社を定年退職されたあとは、彦根にある聖泉短期大学をつくられ、初代学長に就任されました。今春にはこの大学は四年制に昇格します。また学内では先生たちが創設された産業関係学専攻に、今春大学院が開設されます。先生が蒔かれた種子は、順調に育っています。

昔の伊藤先生を知る人は、「厳しい先

生、怖い人」といいます。ダンディで一分の隙もなく、とつつきにくいという印象をもつ人がいるかもしれません。しかし実体は、気さくな庶民派だと、私は思います。当時の伊藤ゼミには、硬派も軟派も、いろんなタイプの学生が集まりました。先生の包容力と柔軟性は、学生たちにも、ちゃんと伝わったのでしょう。国際人である先生は、福祉や環境の問題を、つねに地球規模で考えておられました。それを広く国内外で、社会活動として実践されたのは、偉大な業績だと思います。

ところで口では京都や同志社を悪く言いがら、人一倍京都が好きで、同志社を愛したのも先生です。遥か天国から、先生の目には、いまの同志社の姿は、どう映っているのでしょうか。

松村 彰（大学文学部教授）